

(様式1)

令和3年度 学校運営協議会自己評価表

浜松市立( 都田南小 ) 学校運営協議会長

<評価項目1> 学校運営の基本方針について熟議することができたか。

- 学校長から都田南小学校の教育方針について説明があり、その熱い思いが私たち委員にも大いに伝播した。コロナ禍における難しい対応を強いられる中で、子どもたちの健康・精神面に最大限配慮しなければならず、教員の負担は増大したのではないかと憂慮している。コロナ禍はICT教育の前倒しをし、十分な準備ができないまま各校ICT教育に突入したといえる。ICTの活用状況については、熟議ができ、協議会で共通理解できた。
- いろいろな視点からの意見があり、良かった。
- 「開拓者魂」を根幹にすえて、目指す学校像・子供像・コミュニティスクール像を設定している点は大変評価できる。
- 学校教育現場においてはこれまでの手法の踏襲、不変・安定体制を望む風潮が多い中で、都田南小の取り組みに対する姿勢は極めて前向きであり、校長をリーダーとする職員の気概が運営協議会委員にも十分に伝わった。

<評価項目2> 学校運営に資する活動について熟議を進めることができたか。

- 様々な活動を実際のアクションへつなげるべく、熟議の上で実行に移せた。
- 図書ボランティアやPTAの困りごとも含め、要望のあった活動について熟議をし、良い方向へ向かうことができた。
- 学校からの要望に基づいて、外国語ボランティア、校外学習支援、生活科授業支援など、ボランティアのかかわり方について熟議し、実際の支援につなげることができた。
- 学校側が地域住民に望む要望と、地域が学校側に対して可能なボランティアを、ブレインストーミングの手法を使いながら抽出した。学校側の困りごとや住民が可能な関りを明確化したことによって、必要な場所にピンポイントにマッチングをすることができるようになった。また、読み聞かせボランティアやPTA役員と協議会委員との意見交換を行ったことにより、これまで別々に活動していた各団体の信頼度が高まり、互いの連携が今後深化していくのではないかと期待している。
- ボランティアについて、保護者への募集だけでは限界があるため、より効果的な募集方法について熟議できた。
- 協議会の委員、教員、保護者によるワークショップを開催し、都田南小の良さ・学校の困りごと・学校の課題・地域の支援が可能なこと等について率直な意見を交わすことができた。また、このワークショップの方法や内容について、大学の教授から助言をいただくことができた。
- 支援アプリについても協議会での意見を取り入れながら、着実に前進している。

### <評価項目3> 今年度の取組の評価を踏まえた来年度の目標（取組の重点）

- 学校と地域のつながりをより深め、持続できる真のコミュニティ・スクールを目指したい。
- 各委員の視点からの考え方を知り、いろいろな方向から考える必要があると感じた。
- 支援アプリを活用し、学校の要望に合うボランティアを確保していきたい。
- 協働センターとも連携し、ボランティア活動に意欲的に参加する住民の発掘、啓蒙を行っていききたい。
- 音楽ホール、協働センター、大学、企業の関係者がオブザーバー参加する学校運営協議会を開催し、学校活動支援において協力いただけることを中心に熟議する。
- 学校からの要望を、コーディネーターを中心に調査し、学校運営協議会で熟議・調査して、実際の支援を進めていくことが、今後も継続的に求められている。
- 学校行事やPTA行事の開催方法を学校運営協議会で協議し、開催を支援する。
- 年度始めに1年の活動目標を具体的に設定し、協議会の都度、確認や反省を行いたい。そして、年度末には、次の年度の目標を決められるとよい。
- どうすればコーディネーターが活動しやすいか、地域とつながれるかを協議していきたい。
- 地域と学校相互が繋がるためには、相手の属性や抱えている課題を把握することから始まると考える。しかし、現実には自治会活動の参加率は極めて低い。相手に求めるばかりではなく、子供たち、保護者も協力する姿勢を提示する必要がある。次年度は、協議会委員自身も仲介者となり、保護者の理解を求めながら、地域活動に子どもたちや保護者を囲い込む手法を検討していきたい。

### <評価項目4> （協議会の取組や学校運営に資する活動について、教職員、児童・生徒、保護者、地域に周知することができたか。）

- コーディネーターが学校のCSルームを起点に活動を始めた。
- 広報誌（CSだより）は、臨時号を含め7回発行した。教職員・児童生徒・保護者にCSの活動を広報してきた。また、たよりを通してボランティアの募集を行った。
- 広報誌、CSルーム前の掲示、学校だより、ウェブサイト等で教職員・児童生徒・保護者等に広報した。校外活動等での感想を聞く限り、児童は変化を感じてくれているように思う。一方で地域の理解がまだ不十分であると感じる。地域への周知については、その他の方法を模索したい。（例えば、協働センターの活用など）
- ボランティアの募集については、支援アプリを活用する方法の開始に向けて動いている。また、個人的な声掛けなど、小さな努力も継続していきたい。「人集め」の鉄則は、広く空中からビラを撒くのではなく、「人」と「人」との「縁」の中で、個人がそれぞれ持つ「信頼関係」を紡いでいくことが最終的には大きな繋がりを育てていくと考える。ウェブサイトなどのプル型（「待ち」の姿勢）ではなく、根気よくプッシュ型戦略の情報発信をしていきたい。